成廣い。鬱蒼と生茂つた樹がある。大きな枯木が一本ある。昔雷が落ちたのだらう。鐘樓がある。墓場がある。急勾配の瓦屋根を戴いた大きな寺は、西向に庫裏と并んで建つてゐる。

私は靜かに階を踏んで、寺の廊下に立つて、思ひ切りこの鮮しい空氣を吸つてゐた。とみると、本堂の大廣間には人がゐる。女だ。老婆だ、六人ゐる。珠數を揉んで、木魚を叩いて、鐘を叩いて、熱心に御詠歌を上げてゐる。寂びてはゐるが、どこか女らしい、やさしみのある聲で、靜かな哀れつぽい、妙に人の心を

そゝるやうな節廻しに唄つてゐる。

私は無言のまゝ眼を閉ぢて、あの木魚の音と、御詠歌のあはれにふるふ語尾の行方を追ふ樣な心地に柱に倚る。

『時』さうだ。時といふ疾い流は、笑ふ。泣く。眠る。夢みる中に、一歩々々彼等をかつて、何時かかう老いさして了つた。それにしても、御詠歌の中、稱名の中に、安住すべき樂土を描きつゝ、迷はないで、一心に念じ得る彼等の身の上が羨しい。ふと氣がつくと、御詠歌は礑とやんでゐて、さら〳〵と揉む珠數の音が

高くなつた。

註釋　▽急勾配（急なること）　▽語尾（言葉じり）

類題　▽教會堂　▽神社。

類語

○猫と小鳥

ちう〳〵と、可愛らしい聲が庭で聞えると、今迄日あたりのいゝ縁側で、丸くなつて、鼻を鳴らして居た猫のサンが、グツと起きてブル〳〵と小早な身ぶるひと同時に、縁側を飛び下りる。何をするかと見て居ると、枝から枝へ飛んで、餌をあさつて居る。

小鳥の影を、しきりに追つて居るのだ。影が向の枝へ走ると、兩足を縮めて身を低くし、のそりのそり足音のせぬやうに歩いて、いま五六歩となると、後足をもち〳〵さして、ぱつと飛びつく。小鳥はまた白い小さい羽を日にひらめかして、ぱら〳〵と散る。猫は力拔けた樣に枝を見て居る。

やがて、馬鹿らしいと云つた樣な風に、尾を地にすりながら、垣根のすき間から外へ出て行つた。

サンは毎日こんな事をやるのだ。そして目的物は取ることが出來ないで、疲れて止めて終ふ。何故愚

ひ切つて、止して終はんのだらうと思ふことも度度である。

類題　▽小牛、▽鷄

○蛙

木々の葉は尤う大概落ちて了つて、尚だ僅に梢に殘つて居るのも、それも亦折々秋風の颯と來るのに翻られてゐる。あつ痛つ。とよく視ると、落葉隱れの栗の毬であつた。これに懲りて、よく足もとを注意して、猶此の落葉の道を、かさ〳〵と蹈んで行く。漸つと、此の苦しみを脱し過ると、少し迂廻つた段

段路。それが、雨降擧句であるから、可厭に滑々して居て歩き難いの何んのつて。

下り切つて了ふと、其處は、左樣さ、四五尺ばかりの小流、水は濁つて、其が轄轄と逆巻き流れて、目も眩むばかりの水瀨。そして處々には渦がある。

折れさうな、丸木橋が架つて居るのを、君子を氣取つて渡らずに、反つて此川を、一二三つと飛越したのは善かつたが、雨蛙をきゆうつと蹈みつぶした。その嫌な心地つたら、まあ、今でもそれを思ひ出すと、軀が慄然とする位、けれども、下駄だつたからま

だしもだ。

類題　▽蜻蛉、▽螢。

○級會

茶を啜る。餅菓子をむしゃ〳〵食ふ。鹽煎餅を投る。土瓶を顚覆す。引張あふ。

いやはや大變な騷動だ。

毎も級の惡口屋の蠻襟が、いやといふ程机を打つばたいて、『賴みます。君一つ琵琶やれ。……得意の石童丸を、……え諸君只今から、大眼玉君が御得意の薩摩琵琶をやりますから、謹聽し給へ』、と大聲

で怒鳴る。

すると、謹聽々々の聲が諸方につゞいて起つた。

大眼玉君が、やる、やらぬで、半分體を机に嚙付いて、出まいとする。腕を引張る。尻を突く、押す。くすぐる。

『出給へ』。

『出らう』。

『やれ、弱蟲っ』。

と彌次盛んに、呼ぶ。茶碗が飛ぶ。風呂敷が翻る。教科書が舞ふ。

廊下で靴音がしたが、騷動はまだ止まない。

註釋　▽騷動（さわぎ）　▽得意（最も得て居るもの）

類題　▽茶話會の一節。

類語

○徒歩競爭

どつと、人垣がどよめいた。

今赤が白を乘り越した。白は急り出した。迚も駄目だ。

白は狂人のやうになつた。

赤と白との間隔は三尺、五尺、……一間。

又どつと、鬨聲が起つた。赤が白に追ひついて來た。

白はます〳〵急り出した。

突然、白はひよろ〳〵として、ばたりと、倒れた。

慌てゝ飛起えた。又轉んだ。

どんと、一發。

萬事休す。

又どつと、鬨聲が起つた。

赤が莞爾と、紙包を抱へて立つて居る。

白は舌打し乍ら、音樂隊のかげに消えた。

註釋　▽人垣（人が澤山集まつて垣根のやうになつて居る事）

▽どよめく（動く事）　▽間隔（距離）

類題 ▽ボートレース。
類語

○修學旅行

ふと目をあいて見ると、天井板や、唐紙の具合が、何うも自分の家とは違ふやうだ。はて、何處だらう。變だなあ、夢ぢやないかしらと思つて、首を上げると、隣から、

「おい君も起きて居るのか」。

や、益變だな。

あゝさう〳〵、やつと氣が附いた。自分は今日地歷

の先生に引率されて、鎌倉を見物して、今夜この江の島に宿つたのだつた。

「はて、何時頃だらうな。」

座敷の一隅、今にも消えさうな燈火があるに、時計を取出して見ると十一時半。

「こりや情ない。まだ中々あるぞ。もう一眠だ」。

さあ、何うやつても眠られない。力めて眠らうとすれば、する程、眼はいよ〳〵冴えて來て、種々な空想が頭に浮んで來る。

側を見ると、畫の疲れに同級生は皆よく眠つてゐ

る。

今頃、皆、どんな夢を見て居るだらうか。定めて暖かいホームを夢みつゝあるであらう。

靡々たる海潮の岩角を嚙む音が、烈しく枕邊に聞えだした。

潮が滿ちて來たのであらう。

類題　▽遠足、▽運動會。

○公園

瓢簞池の邊には、五六人散歩して居る。

櫻の樹の下の切株に腰掛けてゐる二人連の老人は、釣魚好きと見え。

「今日のやうなお天氣は、釣魚には持つて來いですな」。

「左樣、鯵などには極好うございませう」。

などと語り合つてゐる。

自分は、鐵柵の傍に腰を下ろして、懷から携へて來た本を出して、讀み初めると後ろの方で、

「此處は御國の何百里――離れて遠き滿洲の……」

と可愛い聲がするから、讀みさした眼を振り向けると、二人の乞食少女が、柵の鎖に摑つて、ぶら〳〵

搖りながら唄つて居るのであつた。聽て、二人の青年が來て、向の木蔭の床机に腰を下した。一人はパナマを目深かに被つて、白足袋に雪駄をはき、他の一人は帽子なしで、白縮緬の兵兒帶を後ろで、結んでゐるのはよかつたが、餡ぱんを出して食べ初めたには聊か驚いた。乞食少女は羨しさうな目付をして、青年の方を眺めてゐる。新聞は如何、報知に萬朝はいかゞです。

といふ聲に驚いてふり返へると、釜帽被つた新聞賣子が、自分の傍に立つて居た。すると、觀音堂の鐘が四時を報じた。

類題　▽郊外散歩。

○日の出前

道は平坦であるが、曉の靄が深く漂ひ罩めて、末は朦朧として少しも見えぬ。呼吸する度に、白い息が輕く顏に掛る。向に一つ人影が現はれたが、顏も貌も陰畫の如く、黑くて誰だか少しも辨らぬ、でほんごほんと大きな咳拂ひをする、老人らしい。擦れ違ひ樣(お早う)と挨拶して行つて終ふ。果して老人だつた。

日は未だ登らない。

類題 ▽夕暮 ▽夜。

○わが村

城神村といふ小さい村である。戸數は二十二戸、人口六十四人。小學生は十九人、中學生は僕一人。軍人は七人、金鵄勳章は六つ。百歳以上の人が一人。汽車や汽艦を見ない人は十九人。時計は三つ。橋は一つ。此の二十二戸は一家の如く、老者を敬ひ、少者を愛して、常に春風が吹いてゐる。

類題 ▽わが故郷。

○試驗場

『質問はありませんか』。

といつて、數學のK先生は私達を見廻した。だが、一同云ひ合せたやうに默つてゐる。暫時は寂として、三十人の眼はみな、黑板の問題に注がれた。と、先生は緣の切れかけた茶つぽい上着のポケットへ兩手を突込んで、ぎし〳〵と敎壇を踏み始める。時々手を出して、袖や、ヅボンについてゐる白墨の粉を、爪はじきしながら取つてゐる。時間になるまで先生は待ちかねてあんなにしてゐるんだらう。

劈頭第一に出て行つたのは、せつかちの森君で、出がけに故意とドーアを荒々しく閉めた。ぎくりと胸に響く。何れも同感と見えて、紙を走る鉛筆の音が一入早くなつた。どや〳〵と、靴音高く今度は四五人一時に出た。胸の鐘は益亂打を初めた。「先生あと何分あります」。と、T君が問くと、先生は大形の銀時計を出して、『まだ七分』。と云つて、腐つた鰯のやうな目で、じろりと一同を見渡した。溫厚なK先生も、この時間許りは眞實に惡魔のやうな恐い人のやうに思はれた。

誰か殘つてゐるかと、ちらと横を見ると、M君S君等のゆつくり屋に、C君等の劣等生計り、只一人級長のA君丈は眞赤になつて鉛筆を走らせてゐる。私には不解の問題が一つまだ殘つて居るのだ。

註釋　▽質問(わからぬ事をたづねる事)　▽教壇(生徒に向つて、先生が講義する所)　▽劈頭第一(最初と云ふ事)　▽同感(同じやうに感ずること)

類題　▽教場。

類語

○春

春の日が暖く、ぽか〳〵と照つてゐる。

此近所では、皆畑へ出て家の中はからだ。淋として何の音もない。

草屋根から騰る水蒸氣の微音がムシ〳〵と聞える。

私は樣々な春の思ひに耽つて、薄赤い枝の混み合つた中を、懷かしい香に包まれて、青草の上を徘徊うに。そして何時か林檎畑をぬけて、村の共同井戸へ出た。竹の輪をかけた、樽のやうな大きな釣瓶の古風な井戸だ。その邊には、近所の若い女が四五人

集つて、土の付いた稼着を洗つて居る。洗つたのを絞りながら、大きな聲で、秋の豐作を話し合つて喜んで居る。一人が盥の水を捨てる。さ、あ――と音を立てゝ四方に散る。そしてまた新しい水を汲み上げて盥に入れる。何だか、春の氣を汲み出して居る樣だ。井戸の中には、大きな春の塊が、入つて居る樣に思はれる。私はまた、元の林檎畑の中を、家の方へ歩いた。

家の裏には、皆、林檎の木へ着物など掛けて、乾して居る。こんな暖かい、靜かな日に、都のM君でも、遊に

來ればよいと思つた。

註釋　▽微音（かすかな物音）　▽さまよふ（あちらこちら歩く事）　▽共同井戸（自分だけでなく、多くの人が一緒に使用する井戸）

類題　▽夏、　▽秋、　▽冬。

類語

○瓜盗人（休暇日記の一節）

伯父が例の癖の、顳顬をせわしく動かしながら、

「西畑の方が、昨晩やられちやつたんだ。岡本（隣の家）の南畑も少しやられたらしいがね。」

驚いた自分は、

「畜生ッ、何んぼ何んでも失敬極まる。伯父さん、今夜、やつつけましやう一件を。失敬極まるッ」。

僕の言葉が、必ずしも痛快であつたのではなからうが、暢氣の伯父も、今度は自分の建案に贊成されたので、早速岡本の家を、箕輪の誠さんに知らせて、手筈の相談に取りかつた。計略する事凡そ一時間、漸く衆議一決して、岡本の勘さん（弟の方）と誠さんとが、畔から町へ出て、日の全然くれた頃、そろそろ楢林の細道から瓜畑へきて、南畑の角の邊に待

ち構へてゐやうといふ事。さてまた、仁さん(岡本の兄)と、自分とは、鎭守の森に沿つて、右へ折れて瓜畑へ出てひそんで、若し盜人が見えたら、棒をふり廻し乍ら、大聲でなぐりかゝるのを、合圖に勘さん誠さんが、前の畑から飛び出て捕へるといふ作戰計畫。四人はおの〳〵謙信、幸村、韓信、ナポレオンを以て自ら任じてをる大將軍であるのだ。四人は二人づつ左右へ別れて出陣した。

日は早や暮れてしまつて、森の梢がくれに月がほのめいてゐる。宵月なので、盜人があらはれる頃には、全くかくれてしまうのである。

仁さんはいふ。

「盜人は大抵當がつきましたか」。

「いや、少しもつきませんので、尙更、愉快なのです、大男が出ると面白いでせう。

なんどとしきりに話しながら、鎭守の森を右に折れて約束の瓜畑へかくれた。

一時間も過ぎたと思ふ頃になると、腰はいたくなる。蚊が集まる。刺す。はたく。又刺す。而も無言の誓を守らねばならず。且つ首だけのばして四邊を見廻

し、耳を聳てるといふ。甚だ複雜な境遇に立ち至つてきた。

あつ。丁度十間あまりも距つた瓜畑に黑い影が動いて、つッ立ちあがつたのは、云ふ迄もなく瓜盜人！。盜人！。

「そらつ、そらつ、やつつけろつ」。

自分は肺から出るだけの聲をだして、棒をふり廻してをどり出る。仁さんも劣らず大聲で。驚いたの驚かないの。彼は矢庭にかけだした。手に籠をはなさぬ。押しの強い奴だ。「うぬ、まてッ」、「こら、またんかつ、絶叫して追ふ。走り逃る。早いかな。敵は大籠を抱へたまゝ、俄かに前へッションのめつた。と思ふと兩側から勘さんと誠さんが躍り出て、ぽかり、ぽかりぽかり四人で漸つと引つたて町へ出て、駐在所の巡査に渡した時、賊の顏を見ると、蝮の權太と呼ぶ村の遊郎者であつた。

賊がつまづいたと思つたのは、勘さんと誠さんが棒で兩側から向脛をなぐり倒したからの事であつた。

類題　▽日記中の一節。

○活動寫眞。

嫌に臭いペンキ塗の香と、人の溫氣と、がや〳〵する話聲で、私は堪へ難いやうな氣がする。その間をラムネや、駄菓子や、蜜柑を賣りながら改良服を着た若い女が歩いて居る。

間もなく呼子の笛が鳴つた。樂隊が止つた。洋服を着た丈の高い頭髪を綺麗に分けた。そして髯を生やした男が出て、今寫る寫眞の說明をする。觀客が、ドッと突ふ。

このハイカラ口上云ひが陰に這入ると、窓が閉つ

て、電燈が消えて、場内は急に以前の暗黑に返へる。ぴち〳〵音がして寫眞が映りはじめた。自分の前に居る子供が、ひし〳〵泣き出した。母親はそれを宥めて居る。

本館獨特の實物應用活動寫眞とかで、瀑布の落ちる活動寫眞を背景にし乍ら、左手に賤ケ屋、枝折戸、木立を見せ、鳴物で雨に降られた太田道灌が出て、雨具を借りる。小女言はず花語らずの身振りには、觀客はみんな恍惚とした。私はふとその技を演じてゐる娘の身の上を考へ、日常の行爲までも思ひ

出された。

パッと明るくなると、群集はみんな出口から、再び淺草公園の雜沓の中へ吐き出された。

類題　▽見世物小屋。

○病

頭が岑々と痛む。

四五日前から前兆はあつたが、時候柄とのみ、餘り用心もしなかつたのである。

昨夜は、一度寐れば何んの事はないと思つたが、今日になつて見ると駄目だ。

枕元には、汚らしく書物が散つてゐる。手を指伸べて、一册取つて見る。字がちらく〳〵する。無暗に、そこ、こゝと繰り返すばかりで纏つた所は讀めぬ。

書を投げると、ばたりと音がして、頭に岑とひゞいてくる。いやに氣ばかり苛々する。

わあ〳〵と階下で子供が騷ぎ立てる。止めればいいと思ふが、何時迄經つても止めぬ。無暗に腹が立つ。呶鳴りつけてやりたい。起きて行つて、打倒してやりたい。併し趨るのがだるい。頭が宙に舞ひ上つて、軀が釘着にされてゐるやうだ。急に喉が乾いて、

水が飲みたくなつた。

暫くすると、稍、靜になつた。と思ふと雨の音がびしびしと喧しくなつて來た。

仰向になつて天井を睨んでゐると、次第に家が動き出して、今にもぴしやんと倒れて了ひさうだ。

類題　寐られぬ夜の所感。

○雨

柳も煙ると云つた絲のやうな春雨が、朝からと降りつゞいて庭の隅に咲き亂れ櫻の花も、皆俯向いてしまつた。

こんな日こそ机の前に坐る。一時間、二時間。あゝ今日も默目かと思つた時、九時が鳴る。と急に又氣がいら〳〵しだす。無理に抑へてじつと考へる、靜かな日を靜かな雨が降つて居る。

何の氣なしに通路を見て居ると、其汚なさつたらない。うつかりして歩いて居やうものなら、自轉車や、人車の轍に、泥土をお見舞されさうだ。

春雨にしつぽり濡るゝ鶯や燕などは、一寸見受けられないが、鐵面皮な雀は、瓦屋根の上で、平氣で、囀つて居る。

春雨の日は、丁度意地の意い姑が嫁を苛めるやうに、隠然人を困らすものだと、いつか心がその方に取られてしまう、

ふと、どうでもいゝやと、いつたやうな氣が頭に浮ぶ、背を柱に思ふともなく、思はぬともない境を辿つて居る自分の心は、所詮だめだとあきらめながら、片一方で何處かに頼る所でも見附けた樣な、考をしきりに繰返して居た。

題題　▽雪の日　▽風の夜

◎發火演習

ドーンと一發、遠くで銃聲が響いた。

横列に并ぶと、小隊長の劍がきらりと光つた。『前へ進め！』駈足とも何んとも言はぬのに、僕等は一齊に腰の短劍を左手に握つて走り出した。ごとごとといやに神經を刺激する彈藥庫、肩にめり込む樣な重い三十年式歩兵銃、僕はたまらなくなつて、幾度か前へつんのめらうとしたのを、辛くも支へて走つた落伍がどん〳〵殘されてゆく。

道はつきて地は開けた。水田を夾んで、四五百米突彼方の丘陵、木影にちら〳〵と白いものが動く。た

しかに敵だ。

『止れ』の號令と共に折敷をして彈藥箱を横にづらした。

『五百米突……弁に打ちかゝれー。』

ドーン、ズドーン、耳ががしんと鳴る。銃口は上に動いた。見當も何もあつたものでない。たゞ無暗に打てばよいのだ。煙が四周を罩める。靜な大氣は急に活動し始めた。

距離が一百米突位になつたので、「劍つけ！」を遣つた。ぴか〳〵、と煙の間に光つて殺氣が充ちた。

やがてわあと一時に叫んで突進する。敵はこそこそと退却して終つた。

丘陵占領、凱歌を上げた。

皆足を揃えて弁んだが、銃を組むと、命令を待たずに草蔭に綿の樣に疲れた身をなげた。

類語　▽遠足　▽修學旅行

○教場

此度は物理だと思ひながら、雜記帳や教科書を抱へて、特別教室に行くと、やがてベルもなつた。先生は夏服のいでたちで、丈は低いが中々侮れない。も

ろんと云ふ事が口癖であるから、もろん先生と生徒はいつて居る。

抑もエネルギーたるや……と變な事を、べらべらしやべるので、生徒は皆、不思議さうに笑つてゐると、先生益得意になつて時を經過して止めない。一二年の生徒は早や辨當を持て食堂に行つてをる。それを見ると腹の蟲がなく。

漸くすんで、教室を出やうとすると、F君が、君、屋上のポテンシアルエネルギーが地に落ちて、それが萬物活動の根本になると、もろんが云つたが、うそのやうだね。僕も少し變だと、思つて居たよ。N君が云ふ。天下の說が、それと定つてをれば、もろんよいではないかと、誰やらが交ぜつ返す。こんな風で聲が高くなつた。

そよ〳〵と吹いてくる風に、ムスク香水の匂ひが、ぷーんとすると思つて、顏をあげると、西の方の窓からもろん先生が、何事が起つたか知らんと云ふ風で、此方を見て居るので、皆顏を赧くして、すたすたと教室の方に駈けた。

類題　家庭の一時間（寫生文）

○朝

あゝ思出す。故郷のあの朝、自分は涼しい朝風に、軀を吹かれながら、裏の南瓜畑に出たのは。

見えるのは、南瓜畑ばかりでは無い。黄ばんだ稲田が一面に見えて、遠い向に、わら屋が一軒、うす紫の煙が立ち登つて、それが低く地を這つたかと思ふと、一はけはいた様に空を拭ふ工合、煙の間からかすかに見える。遠く森が并んでゐて、その傍を、うねつた、小川が白く見える。森の上に一帯紫色の雲が、横はつて、その上龍の様な雲は、赤光を受けて、見る

見る薄紫は、うすらいで、一帯の赤い色がうねつたと見るまに、サツと雲を開いて、圓い〳〵朝日がしづかに登り始めた。栗の并木は、半面溫い日の光をうけて、藪の下の清らかな清水は、目高の群が撫でた様な、砂の上に、身うごきもしないでゐる。

藁屋から人が出て、畔道を鼻歌のどかに、鍬を肩にして、出掛けるのも見える。

日は容赦なく上つた、そして藪には蜻蛉の一むれが、飛廻つてゐる。一歩、二歩、朝のうすい靄の内に包まれて行くと、栗の木あたりで、ほがらかな百舌の

聲がした。何といふ爽かな、朝だろうと自分はその時、呟やいた。

あゝほがらかな故郷の朝、自分は夢うつゝにしか見る事が、出來ない。

類題　▽鎭守祭

○野球

打手の城戸は悠々とボックスに立つた。

群衆は又も呻り返つた。奮戰九回、同二點の然も今や滿壘。

熱しきつた四千有餘の眼は、ボールの飛ぶにつれて、敵のPと城戸とCの間に注がれて居る。

「プレー〳〵」……の應援の聲は秋の天に響く。

夕日に赤い打手の半面には、早や決死の色が見えて居る。

バットを握つた其の手！身構へた其の足！腰！

彌次連は咽に唾を呑み、手に汗を握つて、見詰めた。

果然、飛來る熱球

Fは少し前へ駈出して刹那見事に球を握らうとしたが、それは全然失敗に了つて、球はグローブでバウンドをしながら、コロリと地に落ちた。

歡喜の聲、喝采の聲、剩さへ幾百千の帽子は相上下して空中に飛び上つた。何を打つのか、ドス〳〵と啻ならぬ物音も交る。

其の光景騷擾しいといふよりも寧ろ殺氣を帶びてゐる。人々は半狂亂である。

棚外の柳の木に、中學生が鈴成りに登つて居る

類釋　▽打手(バットを以て球を打つ人。バッター)

▽悠々(落付きたること)▽滿疊(各疊共に走手の居ること)

▽應援(たすけること)▽歡喜(よろこぶこと)▽光景(ありさま)

類題　▽庭球　▽端艇競漕

(終)

明治四十三年二月二十七日印刷
明治四十三年三月二日發行

定價金參拾五錢

編者　育成會編輯部

右代表者兼發行者　東京市本郷區森川町一番地　石川榮句

印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　中野鍈太郎

印刷所　東洋印刷株式會社

發行所　東京市本郷區森川町一番地　電話下谷二四一四　振替口座九三〇八　育成會

不許複製

入學の手引

佐藤益助先生著

幼年學校
中學校
高等學校

入學豫習算術

定價金三拾錢
郵稅金四錢

文學士近藤敏三郎先生著

師範學校
中學校
高等學校

入學豫習讀本

定價金四拾錢
郵稅金六錢

●入學豫習作文の姉妹篇です。
●男生諸君はボール一個の代りに、女生諸君はリボン一本の代りに本書を御買なさい。
●本書を購ふとリボンやボールを買ふと何れがためですか
●ボールやリボンは學問に關係はありなん。
●お父樣やお母樣に此の本を買ふてお貰ひなさい。
●此本が何萬冊も出るのは、お友だちが御存じです。

發兌元 東京市本郷森川町一 振替東京九三〇八 **育成會**

久保天隨先生編　菊半截六百五十餘頁　語類二萬餘

讀書作文 實用辭彙

總クロース
定價金六拾錢
郵稅金八錢

本書は國語漢文通俗語凡二萬を音訓別に類纂したるものにして一々讀方解釋を附し殊に文法上の注意も附し有るが故に一度本書を開かば直に適宜なる說明を得べく又一見して名詞、形容詞等を知り得べし。

本書は實に讀書作文の兩用を兼ぬるに於て又解釋の程度に於て、排列の方法に於て、代價の低廉に於て本書の右に出づるものなし、青年諸君速かに來り本書によりて久保天隨先生の指導を受けよ。

發兌元 東京市本郷區森川町一 振替東京九三〇八 **育成會**

259
1004

無代贈呈

●本書は小學校必要書籍幷に補習教育等の各種の書籍を擧げて其の内容を解説し、且つ其程度使用上の目的を親切叮嚀に示したるものなり。

選書便覽

美麗裝本
菊版
七十頁

●本書は題目や著者名のみにて選擇するときは大なる誤りを來すことあり。教育社會の爲めに玆に無代贈呈す。

發行所 東京本郷區森川町一
振替東京九三〇八番 **育成會出版部**

049806-000-3

特19-195

師範学校中学校高等女学校入学予習作文

育成会

M43

BEM-0537

259
004